

【調査中間報告】

中央大学所蔵「学徒出陣」関係史料を巡って

奥平 晋

はじめに

一九四三年一〇月二日、在学徴集延期臨時特例（勅令七五五）が公布、即日施行された。ここに至り、高等教育機関に在学する徴兵年齢に達した学生生徒（学徒）の在学徴集延期は停止される。加えて、理工医系及び教員養成系諸学校の在学者を除き、直ちに徴兵検査を受けた後、学生生徒は一斉に陸海軍へ入営・入団することとなった。そして、文部省学徒報国団本部による出陣学徒壮行会が神宮外苑競技場で挙行されたのが、同年一〇月二一日のことであった。「学徒出陣」の始まりである。

そもそも、「学徒出陣」は用語としての知名度の高さと裏腹に、その全体像が把握されているとは、必ずしも言い難い。先行する京都大学の関係プロジェクトが一〇年ほど前に指摘したように、「一体何人がこの時期在学中に徴集されたのか、何人が亡くなったのかといった最も基本的なデータすら存在していない」^①段階なのである。その後の個々の大い学における調査・研究の進展により、この状況には変化が生じているが、「学徒出陣」を巡っては、「知名度」^②と「知識」のギャップ^③が存在しているのである。

さて、以上をふまえたうえで中央大学（以下「本学」と略す）の現状に目を向けたい。戦後、一九五五年十一月の創立七〇周年記念時の物故者慰霊祭にあわせ、本学では戦没学生の調査を実施している。ここでは、一九三七年七

月から一九四五年八月までの応召者が対象とされ、「学徒出陣」の学生も含むものであった。この結果を受け、作成された冊子が『中央大学在学中 戦没者名簿』（一九五五年一〇月）^④である。この間の調査結果を反映し、そこには四〇一名の在学中の戦没学生の氏名が、戦没情報（戦没地名・年月日）等とともに掲載されていた。そして、七〇周年記念式典で催行された慰霊祭の祭祀者一覧には、学員戦没者三八〇名等とともに、この四〇一名の氏名が加えられたのである。しかし、本学の学生関係の戦没者はこれが全てという訳ではない。これ以後、関連（継続）調査が実施されなかったこともあり、全貌は未だ明らかにされてはいないのである。

そこで、二〇一五年より活動を開始した「戦争と中央大学プロジェクト」^⑤の趣旨の下、本学の「学徒出陣」関係史料の調査を大学史資料課（以下「当課」と略す）が開始した。ここで検討対象としたのは、「学徒出陣」の該当世代にあたる一九四一年から一九四五年までの、五ヶ年間に渡る学部・専門部・予科の入学生である。この世代を分析することにより、出陣学徒の実数を把握し、さらに生還者と戦没者、復学者と非復学者といった、数値的内訳の解明の可能性がある。加えて、当時の仮卒業制度の運用や学生達の復学時の様相等も明らかとなる可能性もある。

以下、ここにおいては、二〇一五年五月より二〇一六年一月迄の調査作業で明らかになった事柄について報告する。その際、中心となる事項は二点ある。まず一点目は、先述の『中央大学在学中 戦没者名簿』の作成に関わる事柄で、特に当課所蔵の一八〇〇点余の調査葉書と関連史料について。そして二点目は、学籍原簿の調査検討について。以上の二点である。

なお、本調査は二〇一五年の開始であり、未だ年数を経っていない。得られた数値の統計処理も未了であり、後述する学籍原簿に関しても、記録撮影は実施したものの、一部に補充調査が必要な部分もある。よって、本報告は文字通

り調査の中間報告に止まるものとなる。積み残された諸課題は、今後の調査進展のなかで解決されるものと諒解されたい。なお、資料中の「戦歿」は「戦没」に、「廿年度」は「二〇年度」に表記を統一した。

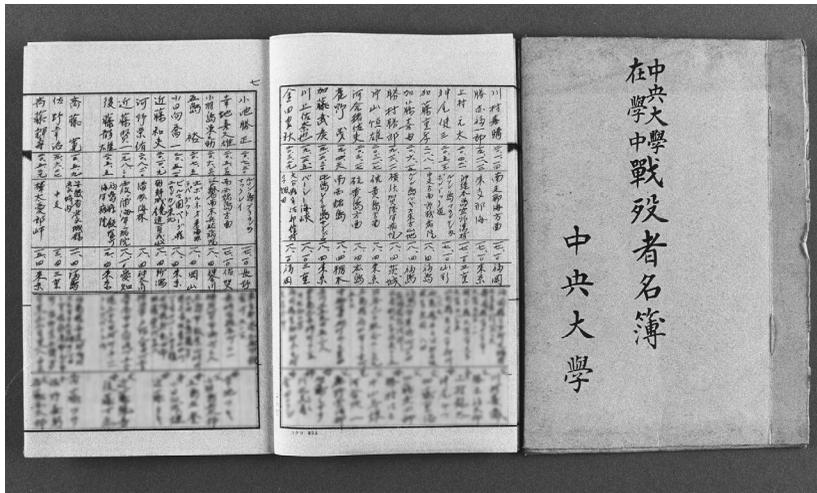
一 本学の戦没学生調査と関係史料

「戦争と中央大学プロジェクト」の活動の一つとして開始した本調査は、一九五五年の創立七〇周年記念を期して実施された、戦没学生調査以来の試みである。その意味で、先行調査の成果である『中央大学在学中 戦没者名簿』の分析・検討は不可欠である。ここでは、調査過程で当該課において所蔵を確認した関係史料に言及しつつ、『戦没者名簿』を再検討するものとする。

(一) 『中央大学在学中 戦没者名簿』

当該が所蔵する標記の史料は、『中央大学百年史編集ニュース』（第九号、一九八七年）において、概略が紹介されている。^⑥ また、『タイムトラベル中大二二五 一八八五→二〇一〇』（二〇一〇年）においても言及されている。^⑦ これらを参照し、また当時の『中央大学学報』を引きつつ、ここでは『中央大学在学中 戦没者名簿』の作成に至る経緯を整理したい。

一九五五年一月開催の創立七〇周年記念式典を控え、本学では慰霊祭の催行を目的とした戦没学生の調査を実施している。この時期、『中央大学学報』には、七〇周年記念委員会事務局名で戦没学生調査についての記事が二度に渡り掲載され、情報提供を呼びかけている。^⑧ まず、一九五四年一月の第一七巻第一号では「慰霊祭挙行のため 戦没学生調査」の標題のもと「このたびの調査は仮卒業の認定ありたる者、および在学中兵役服務の手續をしてその後消



『中央大学在学中 戦没者名簿』

息不明となった者を対象とし」と記す。その後、同年七月の第一七巻第四号においては「在学中の戦没者調査について」の標題の下、「無名の勇士が多数戦没しているはずだと、昭和十年度の入学者から十九年度の入学者につき、学籍簿に兵役服務のため休学手続をしたままになっている者の、現状を調査することにした」と、その目的・対象を強調する。両記事とも、慰霊祭の実施を前提とした調査であり、在学中の戦没者情報の収集に重きがある旨が強調された内容である。かかる方向性のもとで、本学における戦没学生の調査が進行したのである。

もとより、これらは、刊行された『戦没者名簿』の「名簿編製について」の記述、つまり「昭和十年度の入学者より二〇年度の入学者につき学籍簿に兵役服務の届出の仮消息不明者約千八百余名につき入学当時の本籍地の市区町村長に照会し」とする記述と符合するものである。なお、同じく「名簿編製について」に記されたように「仮卒業者又は戦没後卒業を認定された者は学員戦没者として」名簿には収録されていない。

そして、この調査によって得られた情報が集成されて、刊行

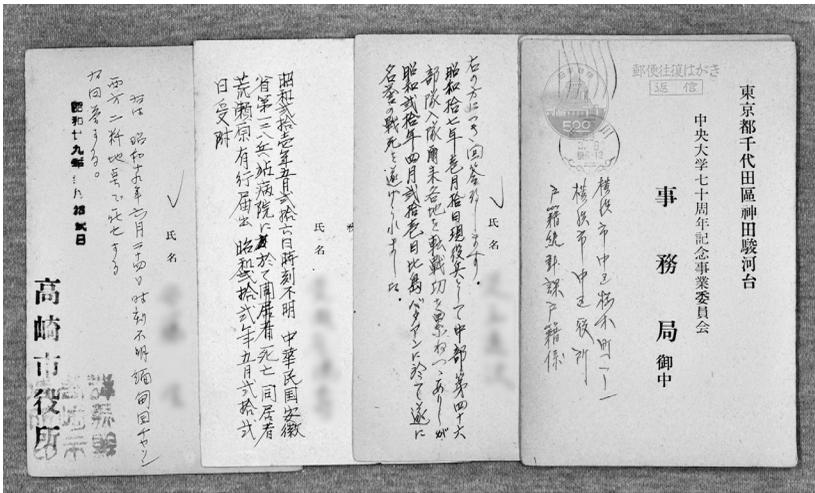


戦没者調査葉書（全体）

をみたのが『中央大学在学中 戦没者名簿』なのである。合計二〇丁の構成。この戦没者情報の項目は、順に、①氏名、②戦没情報（死没年月日・場所）、③入学年次、④本籍、⑤遺族氏名の、合計五項目である。しかし、後述する調査葉書から『戦没者名簿』に情報を引き移す際に生じた誤記等も散見される。それゆえ、その訂正と学生の所属情報等の追加も含め、本名簿をベースとした補正作業を現在進行させている。戦没学生の傾向や特徴等、今後判明することもまた多いものと予想される。

（二）戦没学生の調査葉書

『中央大学在学中 戦没者名簿』の作成に際し、学籍原簿に記載の本籍地役場に、学生の安否確認の往復葉書を送達したことは既に述べた通りである。この葉書の記述情報が、『戦没者名簿』の基盤情報となった訳である。そして、この葉書（一部に封書）を、一群の史料として当該が所蔵していることが判明したのは、二〇一五年五月のことである。この確認当初の保存秩序にあって、葉



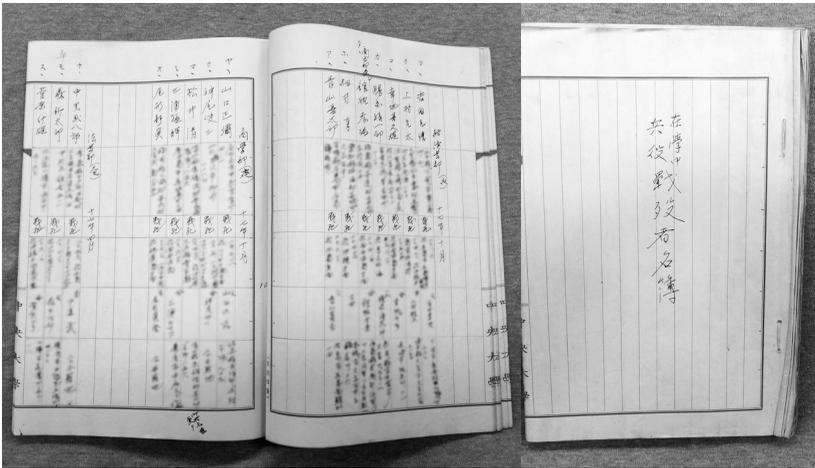
戦没者調査葉書（一部）

書は返送時期によって五群程度に分割されていた。最も多いのは、『戦没者名簿』刊行の前年、一九五四年二月の返送分で約三五〇件。これに、同年五～六月にかけての返送分が約八〇件で続く。以後、同年一〇月まで葉書の返送が続いており、その総点数は約一八〇〇点¹⁰に及ぶ。

このたび、これら一八〇〇点余の葉書を分類・精査したところ、生存情報が最も多く、一〇〇〇余件。戦死・戦傷病死が五〇〇余件。復員後の死亡（戦争との関連は薄い）が七〇余件。残りの一六〇件ほどが消息不明（未復員等を含む）であった。もとより、本史料群は『戦没者名簿』の作成過程での担当部署における検討の過程を伝えるものではないが、その内容を再検証する意味においても、価値は高い。

（三）『在学中兵役 戦没者名簿』

前記の調査葉書同様に、この度の調査に際して、当課において所蔵を再確認した史料がもう一点ある。『中央大学在学中 戦没者名簿』の完成に至る前段階で作成された稿本である。完成版と体裁はほぼ同じであるが、当初は卒業年別、所属別に学生を集約



『在学中兵役 戦没者名簿』

して採録の予定であった模様である。また、所々に書込みのある『報告二依ル戦没者』が別冊で添付されている。これらが総合されて、『中央大学在学中 戦没者名簿』に至ったものと推測される。これもまた、『戦没者名簿』の生成過程の全てを明らかにする史料ではないが、完成版との比較検討が必要となろう。

なお、本来『在学中兵役 戦没者名簿』は先述した調査葉書と同一の群で保存されていたものである。ともに、中央大学七〇周年記念委員会事務局から本学広報課を経て、一九八五年五月に大学史編纂課（当課の前身）に移管された史料である。^①

（四）『中央大学在学中 戦没者名簿』に未掲載の二六名について

本名簿には四〇一名の在学戦没者の氏名が掲載されている。この四〇一名と、先述の調査葉書を照合したところ、本籍地役場の報告により戦没の事実が確認されながら、『戦没者名簿』に氏名が掲載されていない学生が存在することが明らかとなった。その数は合計二六名。そこで、これら学生の詳細を学籍原簿により確認したところ、一六名が卒業生であったことが判明した。併せて、創立七〇周

年記念式典で開催された物故者慰霊祭における祭祀者一覧の「學員戦没者」のなかに、これらの一六名が含まれることも分かった。つまり、卒業生であったことで「學員戦没者」として分類され、在学生とは別扱いとなったものである。その点は、『中央大学学報』において強調されていたことと通じる事柄である。但し、残る一〇名は未卒業の扱いであった。『戦没者名簿』への収録が無いことについては、今後の調査課題としたい。¹³

二 学籍原簿の調査・検討

既に述べたように、この度の調査にあたり、「学徒出陣」の該当年代として一九四一年から一九四五年を設定し、この間の入学生の学籍原簿の調査を計画した。具体的には、学籍原簿に兵役情報のスタンプのある事例の記録撮影である。以下の記述は、この作業過程で明らかとなった事柄である。

なお、撮影作業は、関係する法・経済・商三学部の許可を得て実施した。期間は二〇一五年一月四日（水）より、同月二〇日（金）までの実質一〇日間。デジタルカメラによる撮影である。

（一）学籍原簿の様態

戦前期の学籍原簿は、現在すべてハードカバーによる再編綴が施されている。これは戦後のある時期に、一括で再編処理されたものと思われる。また、この再編時の処理であろうが、個票の並びは学生の所属（学部・専門部・予科）ごとに、五十音順で全て配列されている。そしてこれらは、「学籍・成績簿」の標題の下で「学部・専門部」の系統と、「学籍簿」の標題の下で「予科」の系統に分けられる。さらに、学部・専門部の系統は、「卒業」と「未卒業」（未卒業）とに分けられる。この未卒の系統にあつては、一九三六年から一九四〇年にかけて入学し、兵役に就いた学生の学籍

原簿が、「応召」簿冊として六分冊に調製されている。この時期に兵役についての表れであろうが、その理由・背景に関しては今後解明の要がある。

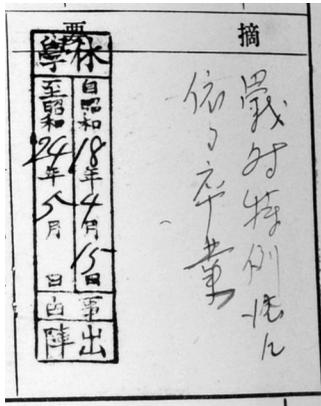
一方、予科については、学部・専門部とは様相が異なる。まず、予科の簿冊は「学籍簿」の標題のもとで、第一予科と第二予科に分割される。そして、同様にハードカバーにより再編されているが、学籍原簿の様式が学部・専門部とは異なるため、外形上の違い（横長）がある。

次に、様式面から学籍原簿をみると、学部・専門部の系統と予科の系統では、大きな相違があることが分かる。まず、学部・専門部の学籍原簿は、B5判の厚紙製で、用紙の上半分に学籍番号・氏名の他、学生の基本情報の記入欄が設けられていた。兵役関係では、「徴兵事故」欄と「摘要」欄がこれに充てられている。そして、原簿の下半分が各学年における成績評価欄となっている。

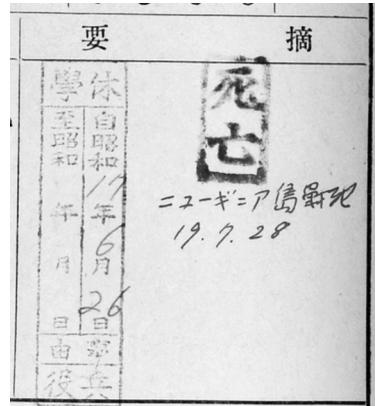
他方、予科（第一、第二）にあつては、二名の学生の情報が一枚の様式に記入され、しかも成績評価の記載欄が無く、判型自体が異なるものだった。よって、予科の学籍簿に盛り込まれた情報は、紙幅が狭いこともあり、極めて限定的なものであった。これは後述する兵役情報に関しても、自ずと情報量の制約を伴うものであった。

（二）兵役情報の処理

既に指摘したように、学籍原簿の中段右の摘要欄には学生の兵役情報が記された。本来、当該欄は転部・転科等の学籍の変更情報が記される箇所のはずである。実際、そのような使用例が多い。しかし一方で、大学側で把握された学生の兵役情報が加えられているのである。学部・専門部に関しては、当該欄に専用の縦型スタンプが押され、ここに兵役情報が集約された。主として、兵役関連の事務量の増大から、スタンプが製作され、使用に供されたものであろう。



兵役関係スタンプ（出陣）



兵役関係スタンプ（兵役+死亡）

とここで、当時の兵役事務の処理にあたっては、補完的に小型のスタンプが用いられていた。「応召」、「兵休」、「戦死」、「死亡」の四種類がそれである。小型スタンプは、単独で用いられる場合も見られるが、概ね、兵役・出陣とい

そして、このスタンプには複数の種類があり、使い分けがなされていたことが学籍原簿より確認される。大別すると、「兵役」と「出陣」の二種類のスタンプ¹⁵⁾である。形式的に見れば、最上段に「休学」とあり、その下に休学の始期と終期を記入するための空欄が左右にあった。そして、「事由」の下、最下段に「兵役」、或いは「出陣」の文字が置かれたのである。

この、基本的に同形式の「兵役」と「出陣」のスタンプについては、恐らく日中戦争期に前者が作られ、続いて先行する形式を踏襲しつつも、前者との切り分けを意図して、後者が製作されたように思われる。例えば、学生の一斉入隊が実施された一九四三年一二月をひとつの画期としても想定されよう。ともあれ、今後、両者のサンプル調査を重ね、スタンプの登場時期と実際に使用された期間との相関関係を把握する必要がある。加えて、これまでの調査の限り、当初はスタンプの種類により、赤（兵役）、青（出陣）と、インクの色を使い分けた傾向も確認できる。つまり、当初より、「兵役」と「出陣」とを峻別する意図があった可能性もある。

う主情報の補完の意味から併用される事例が多い。例えば、戦没情報が確認された場合は、いずれかの兵役情報スタンプの脇に、「戦死」もしくは「死亡」スタンプが押され、さらに手書きで戦没情報（戦没年月日、戦没地等）が補記されるといふ訳である。これらは、先に紹介した二種類のものとは異なり、遙かに小型であったが、学籍原簿の摘要欄にたびたび現れるものである。

以上、兵役情報の記入にあたって複数のスタンプが使用されたことを指摘したが、これらと同型・類似のスタンプが、同時期に存在した。「病」のスタンプ¹⁶である。これが学籍原簿において顕在化するのには、主に戦争末期から戦後にかけてのことである。よって、同形式の縦型スタンプの系統としては、「兵役」、「出陣」、そして「病」と製作され使用されたものと推察される。このスタンプの系譜についても、今後確認の要があるろう。

また、兵役情報に関わる主要二種類のスタンプには、同形式で小型（縮小版）のものがあり、実際の使用例も多い。摘要欄への、兵役情報等の記入事項の増大を想定してのものと思われるが、これも使用のパターンを解き明かす必要があるろう。

なお、ここで分析の対象としたのは、学部・専門部の学籍原簿に限られる。様式・体裁の異なる予科のそれについていえば、学籍簿に兵役情報が明確に現れる事例は、今般の調査の限りでは僅少である。戦没情報が上下の余白に手書きされる例も散見されるが、学部・専門部のように、大小複数のスタンプを駆使して兵役情報が学籍原簿上に記録される事例は見られない。予科生の兵役情報が何処に、どのように記録・管理されたのか、併せて調査する必要があるろう。

以上が、本学所蔵の「学徒出陣」関係史料の概要と、これ迄に得られた調査の結果である。本調査は創立七〇周年記念事業の一環として一九五〇年代に実施されて以来の、戦没学生調査となる。新たな発見がある一方、未だ残された課題も多い。最後に、成果と課題について概観し、本調査のまとめとしたい。

第一の成果は、『中央大学在学中 戦没者名簿』（一九五五年一〇月）の作成にあたり、その根拠情報となった多数の葉書が、ほぼ原型のまま再発見されたことである。これは、戦没者名簿の稿本と併せて、本名簿の作成に至る過程を明らかにするものとなった。とりわけ、葉書に記された情報により、名簿の記述事項（特に戦没地等）の補正が可能となったことは大きい。そして、第二の成果は、右記に関連して、戦没学生二六名が『戦没者名簿』に氏名を掲載されなかった理由がほぼ明らかとなったことである。さらに、第三の成果は、関係する三学部（法・経済・商）の許可を得て実施した学籍原簿の調査により、当該期の学生の兵役情報の処理の一端が明らかになったことである。これは、学部・専門部において兵役情報の処理に際して駆使された、「出陣」「兵役」等の各種スタンプの用法を指摘した点に集約されよう。

一方で、残された課題もまた多い。まず第一に、学籍原簿に現れた兵役関係のスタンプ情報をどのように読むかという問題である。「兵役」と「出陣」との使い分けのパターンはまずもって解明の必要がある。加えて、このスタンプが無くとも、兵役に就き戦没に至った学生がいた可能性を、どのように判断するか。以上は、最終的に統計処理をする際に大きな意味を持つこととなる。第二に、予科学生の兵役情報の所在に関してである。既に述べたように、予科の学籍簿から兵役情報をうかがい知ることは難しい。関連する記録から、それを抽出する必要がある。そしてより大きな課題として、第三に、学籍原簿より得られた個々の兵役情報を集計して、様々な観点から統計データを導

き出す必要があろう。なお第四に、今後は学籍原簿以外の学内史料にも目を向ける必要がある。もとより学籍原簿として、万能ではない。調査・分析の視野を拡げる必要も最後に指摘したい。

以上が、二〇一五年度の本調査に関する成果と課題の総括である。「戦争と中央大学プロジェクト」は、始まってよりなお日が浅い。今後、さらなる調査を進め、指摘した課題の解決を果たし、本学の「学徒出陣」に関する全体像の構築に貢献するものとしたい。

(大学史資料課嘱託)

〈注〉

(1) 西山伸「調査研究の概要」『平成一六・一七年度総長裁量経費プロジェクト 京都大学における「学徒出陣」調査研究報告書 第一巻』二〇〇六年、一頁。

(2) この間、各大学において多くの成果が公刊されている。例えば、東京大学史料室編『東京大学の学徒動員・学徒出陣』(一九九八年)や京都大学文書館編『京都大学における「学徒出陣」調査研究報告書(第一巻)』(二〇〇六年七月)、『京都大学における「学徒出陣」調査研究報告書(第二巻)』(二〇〇六年三月)。一方、私学にあっても、老川慶喜・前田一男編著『ミッシヨン・スクールと戦争―立教学院のディレンマ―』(東信堂、二〇〇八年)や明治大学史料センター編『戦争と明治大学―明治大学の学徒出陣・学徒勤労動員―』(二〇一〇年)がある。また、白井厚『大学における戦没者追悼を考える』(慶応義塾大学出版会、二〇一二年)。個別の論考では、川口浩「早稲田大学戦争犠牲者調査について」『早稲田大学史紀要』(第一八巻第二二号、一九八六年)、西川賢「統計」立命館大学関係の「学徒出陣」者数調査『立命館百年史紀要』(第二号、一九九四年)、小松修「日本大学における学徒出陣と戦没者」『日本大学史紀要』(第二号、一九九六年)、永田英明「東北帝国大学における「学徒出陣」」『東北大学史料館紀要』(第二号、二〇〇七年)、河西晃祐「東北学院に残された学徒出陣史料について」『東北学院資料室』(第一三三号、二〇一四年)、星洋和「往復文書類綴」と「主務省関連書類綴」について―学徒出陣関連資料を中心に―『東北学院資料室』(第一三三号、二〇一四年)、などが挙げら

